

2022年 8月 28日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「神の論理と人の心の接点」 ローマの信徒への手紙 3章21-31節 森田信義

31では、ユダヤ人の優れた点は何か。割礼の利益は何か。2 それはあらゆる面からいろいろ指摘できます。まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです。3 それはいったいどういうことか。彼らの中に不誠実な者たちがいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。4 決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。

「あなたは、言葉を述べるとき、正しいとされ、裁きを受けるとき、勝利を得られる」

と書いてあるとおりです。5 しかし、わたしたちの不義が神の義を明らかにするとしたら、それに対して何と言うべきでしょう。人間の論法に従って言いますが、怒りを発する神は正しくないのですか。6 決してそうではない。もしそうだとしたら、どうして神は世をお裁きになることができましょう。

7 またもし、わたしの偽りによって神の真実がいつそう明らかにされて、神の栄光となるのであれば、なぜ、わたしはなおも罪人として裁かれねばならないのでしょうか。8 それに、もしそうであれば、「善が生じるために悪をしよう」とも言えるのではないのでしょうか。わたしたちがこう主張していると中傷する人々がいますが、こういう者たちが罰を受けるのは当然です。

正しい者は一人もいない

9 では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。10 次のように書いてあるとおりです。

「正しい者はいない。一人もいない。11 悟る者もなく、神を探し求める者もない。

12 皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。

13 彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。

14 口は、呪いと苦味で満ち、15 足は血を流すのに速く、16 その道には破壊と悲惨がある。

17 彼らは平和の道を知らない。18 彼らの目には神への畏れがない。」

19 さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。20 なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないので、律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

信仰による義

21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。25 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。26 このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。27 では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。28 なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。29 それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。30 実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。31 それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

今回で、ロマ書の4回目の学びとなります。今日は 3 章全体を学びますが、本日の聖書朗読箇所としては、後半部をお読みいただきました。説教では、1-20節についてもお話しさせていただきますが、スペースの関係で、この要約では割愛させていただきます。21節からですが、21-26節は、聖書協会共同訳聖書、新改訳聖書なども読み込んでみますとこうなります。

「ところが今や、この律法による義とは別に、しかも律法と預言者によって証しされた神の義が示されました。すなわちイエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

とあります。ここに、「律法による義」に代わる「信仰による義」

という神の論理、理屈が述べられています。

パウロは熱心なファリサイ派出身者らしく、そしてローマのユダヤ人信徒のことも配慮して、律法とは別に、旧約聖書の中で証しされてきた神の義が示された、と書いてあります。聖書協会共同訳聖書を見ますと、「預言者」に脚注が付いていて、その脚注をさらに何段階か追って行きますと、ミカ書5章1節、ゼカリヤ書9章9節にたどり着き

「ベツレヘムから、イスラエルを治める者が出る。エルサレムよ、あなたの王がくる。彼は高ぶることなく、雌ろばの子であるろばに乗ってくる。」

とあります。そしてこの王は、脚注にはありませんが、良く知られているイザヤ書53章5節から8節には

「彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり

彼が打ち砕かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによって
わたしたちに平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。
わたしたちは羊の群れ
道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。
そのわたしたちの罪をすべて
主は彼に負わせられた。
苦役を課せられて、かがみ込み
彼は口を開かなかった。
屠り場に引かれる小羊のように
毛を切る者の前に物を言わない羊のように
彼は口を開かなかった。
捕えられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。
彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか
わたしの民の背きのゆえに、
彼が神の手にかかり
命ある者の地から断たれたことを。」

とあります。すなわち律法に代わる義とは、イエス・キリストによる十字架の贖いを信じることによって、信じる者すべてに与えられる神の義であり、そこには、何の差別もありません。人は皆、律法においては罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただ、罪の無いイエス・キリストによる身代りの贖いを通してのみ、無償で義とされる。神はイエス・キリストの血を、それを信じる者の罪を贖う供え物とされた。ユダヤ人は、犯した罪を神に許して頂く為に、贖いの犠牲として二頭のヤギを捧げてきましたが、今や動物の血ではなく、罪のない神の子の命、血を通して信じる者の罪が赦されます。それは、神の義を示しつつ、人が犯した罪を赦すという、神が考えた方法です。27-31節です。

「では、人の誇りはどこにあるのか。それは、取り去られました。どんな法則によってか。信仰の法則によってです。なぜなら、わたしたちは律法を完全に守って実行することができませんので、信仰によって義とされると考えるからです。神は唯一ですから、ユダヤ人だけでなく異邦の人々の神でもあります。この神は、割礼のある者も、割礼のない者も、イエス・キリストの贖いを信じる信仰があれば義としてくださるのです。それは、信仰によって律法を確立するためです。」

とあります。

ここで、信仰による義について考えてみます。神が最も喜ばれるのは何でしょうか。詩編51編18,19節にこうあります。

「もしいけにえがあなたに喜ばれ
焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら
わたしはそれをささげます。
しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。
打ち砕かれ悔いる心を
神よ、あなたは侮られません」

とあります。これは、大きな罪を犯したダビデの深い懺悔の詩です。自らが大きな過ちや失敗をした時、人は、自信も、誇りも打ち砕かれ、自分自身の中ではなく、神に助けを求め、祈ります。その時、そんな私の罪のために神の子が代わって死んでくれたことが、神からの恵みとして、心に浸みこんで来るのです。その時に「過ちや、失敗や、罪を悔いる私の心」と、「イエス・キリストの十字架の贖いという神の論理」が結びつき、その恵みを心から信じる状態が生み出されます。この砕けた心無しには、イエスの十字架の贖いは、単に神の論理であり、私とは関わりがないのであります。人間は、自分の権利を要求し、自分の欲求を満たそうとし、神の律法を形だけ守ろうとする。元来、心から神を信じる心があって、その上で具体的にどう生活するかが律法です。しかし人間は、神を心から信じる心を置き去りにして、人の目に信仰深い者と見える形で振る舞う罪を身に着けました。そんな人間に、本当に心が砕かれた状態の者だけがかけがえのない恵みとして受け取れるイエス・キリストの十字架の贖いという福音を与えました。

だからイエス・キリストの十字架の贖いを信じる信仰を持つ者とは律法を守る者の本来の心を持つ者であり、その意味で信仰は、律法を確立するものであります。神は、律法においては罪人とされる人間を赦すために、罪のないイエス・キリストを身代りに殺して血を流させた。そしてそれを自分のためとして心から信じる者をその信仰故に罪を赦す論理と犠牲を払われた。しかしここで必要なのは、それを自分に対する恵みとして涙をもって受け取る心であります。自信と誇りと権利と欲求ではない、打ちのめされて、失敗して、弱って、砕かれて、イエス・キリストの身代りの贖いが自分のためと思える心、その心を持つ人間を、そのような心から出る信仰によって罪の無い者とみなしてくださるのです。神はあくまでも義を貫き通す神であり、ユダヤ人とそうでない人の差、人間の自信や、誇りや、欲求と正反対の状態の中で全ての人間に福音として与えられる信仰義認の信仰がここに述べられています。それによって、外見のユダヤ人だけが選民という壁が破られて、このイエス・キリストの教えと命の犠牲がユダヤ教と繋がりがながらも、世界の福音、世界のキリスト教へ転換してゆきます。